

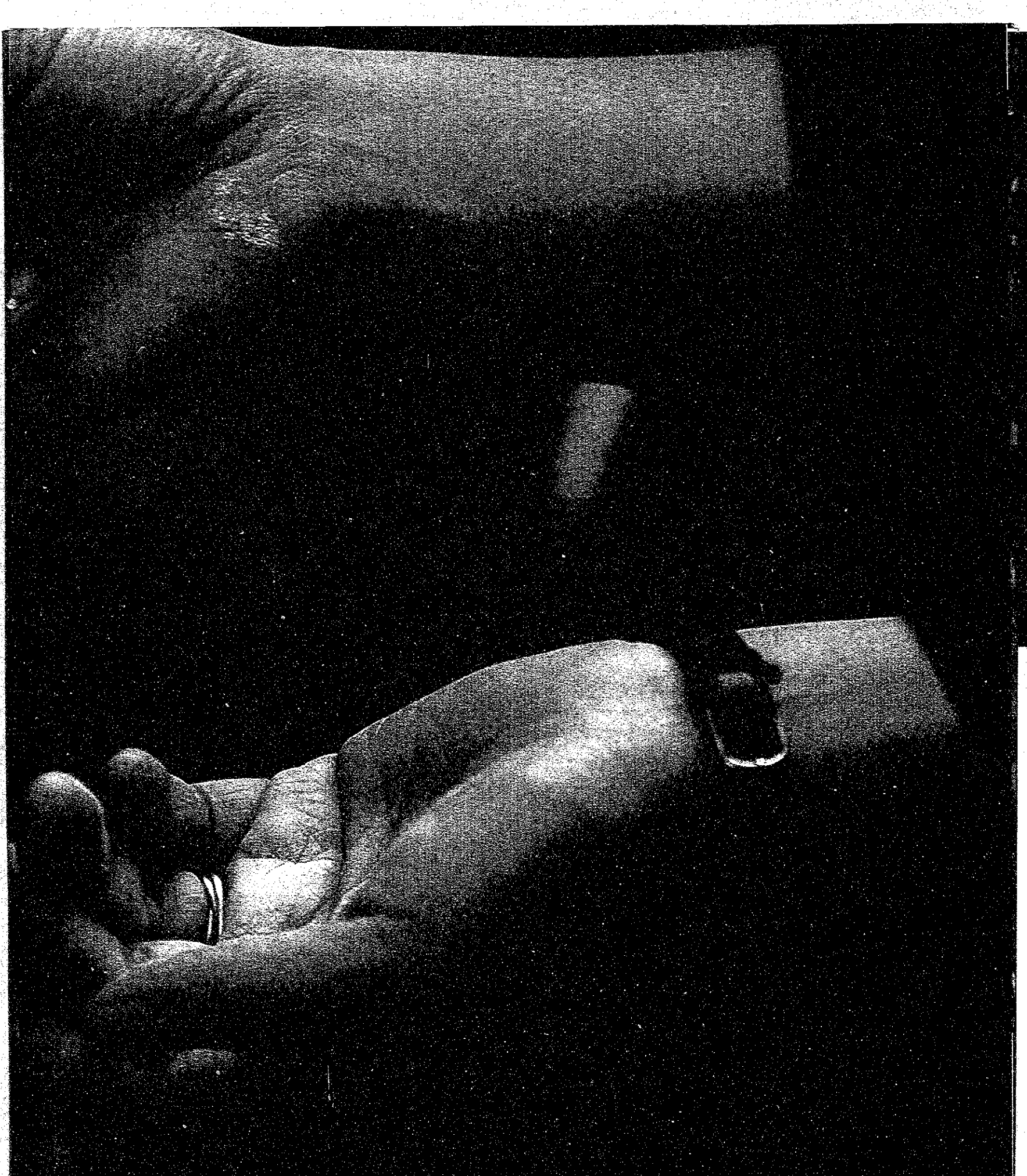
[BANGLADESH]

字が書ける喜び。

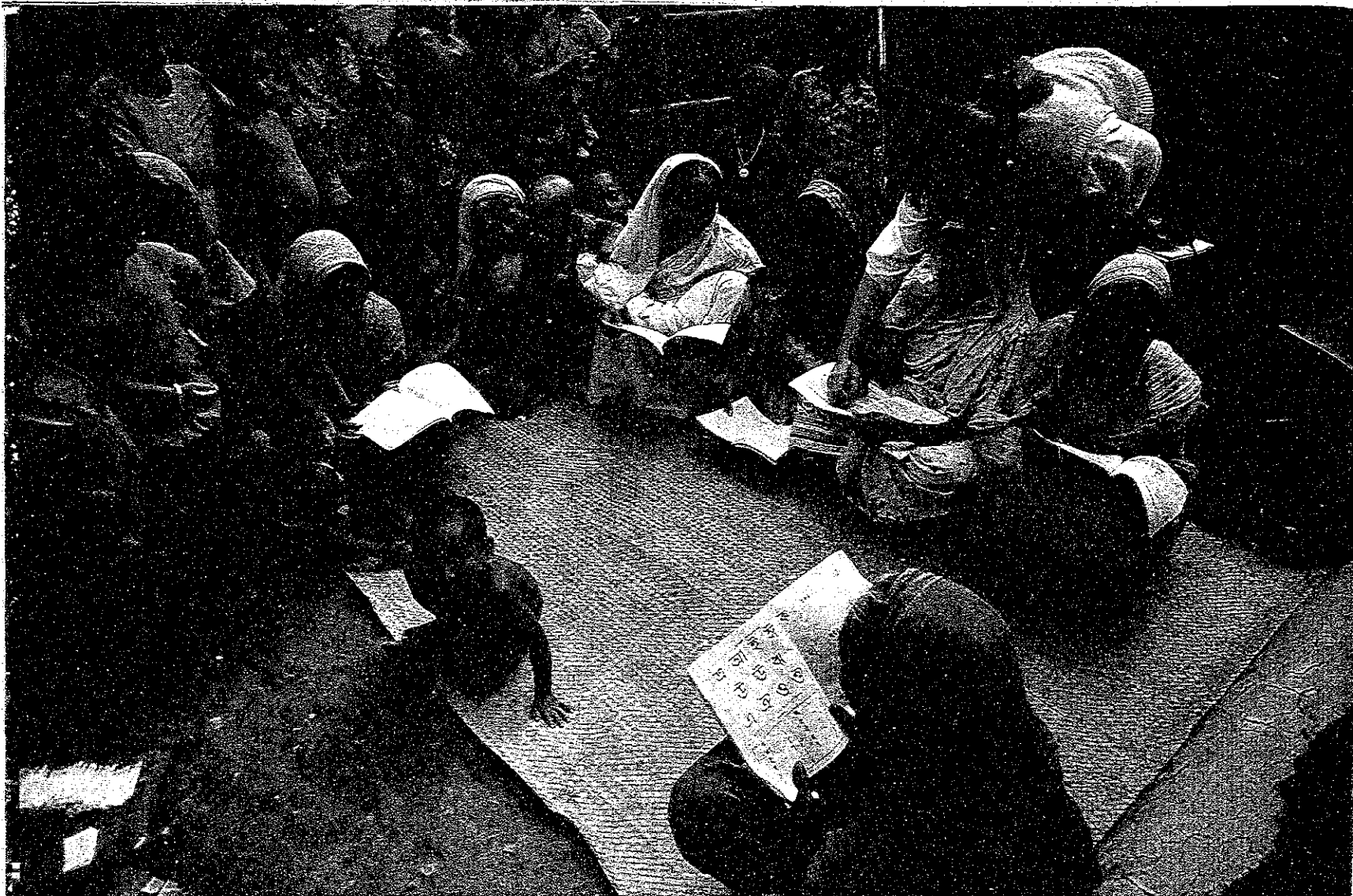
文字を書く練習といわれて、チョークをどのように握ればいいのか戸惑っている婦人たち。子供のハナをかんだサリーの端で食器を拭くという衛生観念。妊娠中にもかかわらず断食の戒律を守ることによってお腹の赤ちゃんに神の御加護があると信じ、あげくの果てに死産させてしまった妊婦……それまで海外旅行体験もなかった日本女性が、突如飛びこんだイスラム社会でベールの内側に垣間見たものは、理解しがたい無知と、その反面、大河の流れにも似た悠々とした農村の時間のサイクルであった。

チョークの持ち方から教える識字学習。





正しいチョークの持ち方を教えようとしている
識字指導中の刑上隊員。
彼女はここでの体験から、字を書いたことのない人というのは、
筆記用具を使いこなす
筋肉が未発達のままなのではないか
と考えるようになった



自覚する女性たちと、 男性社会の無理解。

(左) 外出するためにベールを解いた農村の婦人。

婦人に対する識字教育を始めたことで、男たちからの様々な抵抗に出会ったという。その裏には、男たちにも字が書けないというコンプレックスがあった。

ある女性は主人から暴力をふるわれたあげく家から出してもらえなくなった。

また別の村では、一時、女たちの外出を長老たちが監視していたこともあったという。

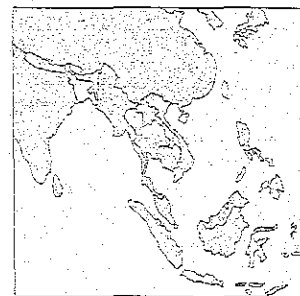
(上) カードに記した単語を読む婦人。

これはプログラムの第2段階でアルファベットの習得が第1段階。

(下) 読み書きをしたことのない大人に指導するのは、適応能力のある子供に教える場合の

3倍以上の忍耐を要すると湖上隊員は語っていた。

約5カ月の教育後、布と針を支給してハンカチの刺繍を教える



派遣職員●家政・手芸
イスラム農村における女性の地位向上をめざすのが目的で、外国人非イスラム教徒という立場で女性社会の内側に飛び込んで、彼女らに刺激を与え生活改善に取り組ませようとしている。

読み書きを教え、衛生観念を培い、手芸等によって手に職を持たせ、わずかながらも現金収入を得させようと活動している。

バングラデシュ●人口1億256万人(87年)首都ダッカ。共和制をとり元首はH・M・エルジャド大統領。公用語はベンガル語。宗教は国教としてイスラム教83%、他



少ない情報、遠いソングラ。

洪水、疫病、最貧国、人口爆発……ベンガラदेश関係者が等しく悩むことは、この国に張られたレッテルが暗いものばかりで夢がないということだ。どれも事実であることには違いない。日本の半分にも満たない面積の国土に1億人以上がひしめいており、洪水はときには国土の半分をも水没させてしまう。あるいはサイクロンによる死者のニュース。無理もない、われわれに届く数少ないベンガラ情報といえば災害の話ばかりなのだ。

私にとってはじめてのベンガラである。空港からダッカ市内への道。道路はおびただしいリキシャ（自転車型ホロ付き三輪車）であふれていた。こちらの車は、リキシャとリキシャの空間をみつければ、クラクションを鳴らしつつ放して右に左にグイグイと突っこんでいく。リキシャの車体後部はカンバスになっていて様々なモチーフが、大胆かつ毒々しいばかりの極彩色で描かれている。花々、美女たち、ボーイング747、etc……それらに混ざって日本の金閣寺を、滝のような金ピカで描いてあるリキシャをそこら中で見かけた。1台追い抜くたびに金閣寺や747がうしろに飛んでいく。車夫たちの剃出しの肌^{はだか}に光る汗、風にひるがえるサリーの華やかさ、そしてクラクションの狂騒が熱気をかきまぜる通りは、どこまで走っても湧き出てくるような人波であふれていた。

生きていくことの熱気がビリビリと伝わってきた。どうしてこの裸のベンガラがわれわれのもとにストレートに届いてこないのだろうか……

ダッカ郊外の農村にある公務員宿舎の一画で、下村奈保子、瀧上いさ子が共同生活をしている。2人とも滞在は3年目で、もうすぐ任期を終え帰国する予定となっている。

「ベンガラ派遣の通知を受けとってすぐに、中学時代の地図帳で捜したんですがどうしてもベンガラをみつけることが出来なかったんですよ。地図にもない国へ行くことになるのかと不安になっちゃいましたよ。(ベンガラदेशの独立は1971年、それ以前は東パキスタンであった)」

さらに下村が当時を振り返って、「お恥かしい話ですけどね、外国ってどこでもローマ字のアルファベットを使っていると思ってたんですよ。そしたら、見たことも

ないベンガル文字でしょ、驚いてしまいましたよ」

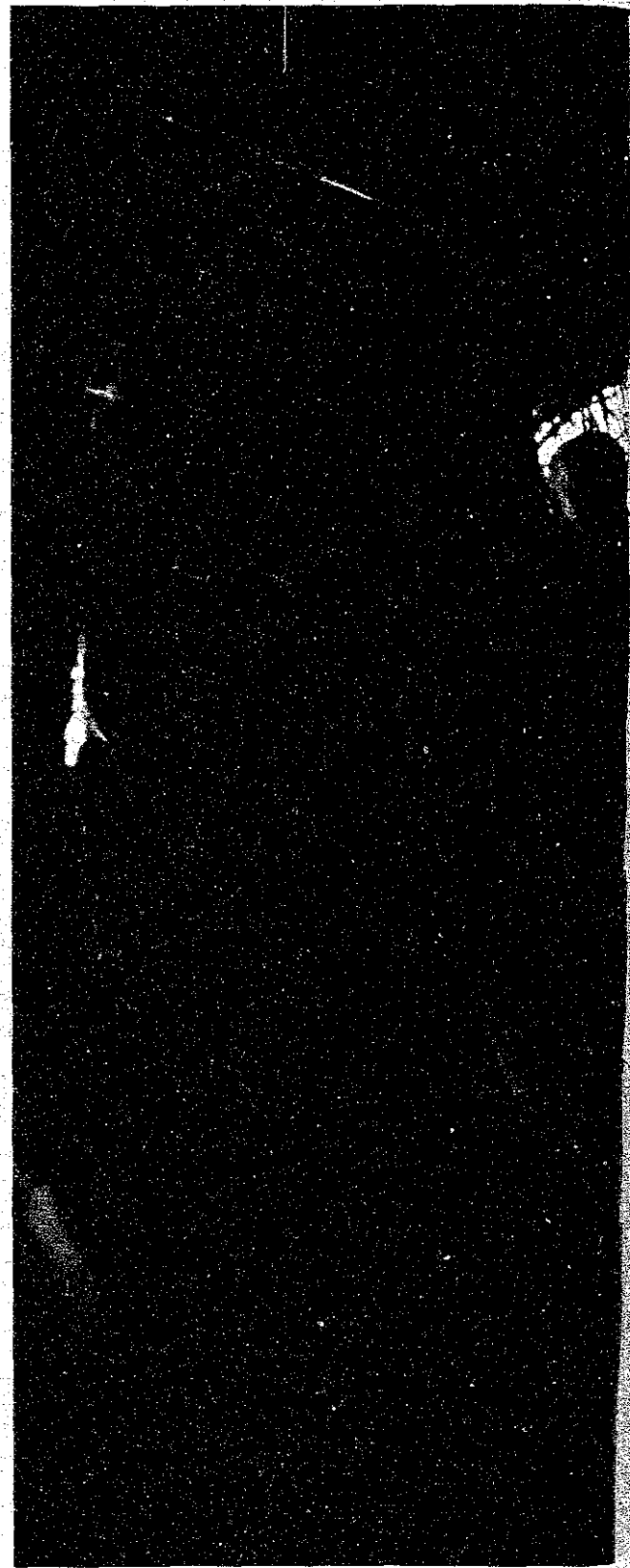
瀧上いさ子も、ベンガル文字にはじめて接したのは派遣前3カ月間の訓練期間であった。その自分がベンガル人にベンガル語の読み書きを教えていることのおかしさを振り返る。

「でも村のおばさんたちだって、世界中どこへ行っても言葉はベンガル語だと信じているんですから似たようなものですよ。読めて書ける私たちが、会話となるとどうしてきこえないのか、彼女たちにとっては、これが理解できないらしいんですよ」

瀧上いさ子とリキシャに乗って彼女の識字教室の現場に行く。2人の日本人を乗せた高齢の車夫は、デコボコの農道を、骨ばった身体から絞った全体力をペダルに乗せてこいでいく。裸足の、息せき切って頑張っている後姿を座席から見下していると、裸の人生を間近に眺めているのだという哀愁をひしひしと感じてしまう。瀧上は、乗車賃1タカ(4.5円)を値切る攻防のために3人の車夫を追い返していた。値切りが半ばゲームであるにせよ、女性隊員たちの生きるしたたかさをまざまざと見せつけられる思いだった。実際の国にあっても、環境の変化についていけず、へたりにかっている一部の男たちを尻眼に、女性隊員たちには深々と根を張っている風情があった。

リキシャをおりて歩いてゆく私たちを、子供たちが「インガス！」(ベンガル語で英国人の意味)とからかう。ここでは外国人はみなイギリス人なのだ。家々は、少しでも高く積まれた土台の上に建てられている。どれも泥壁の簡素な家だ。洪水に襲われれば溶けてしまうが簡単に再建できる。読み書きを教える一方で、ハンカチ大に切った布を渡して刺繍を教える。ハンカチは衛生の習慣をつけさせるためだ。1枚のサリーの端っこで汗をふいて、子供のハナをかませ、それで食事用の皿を拭いている好景をしばしば見るといふ。授業が終わると瀧上と私のために鳥肉、タマゴ入りのカレーがふるまわれた。彼女らの最高のもてなし料理である。

2人の隊員は3年近い滞在の間に言葉もほとんど覚え、ベンガルの土にすっかりなじんでいる様子だった。少い物質のなかで伝統的につましく生きている人々の、貧しさなるが故の弱さや素朴さ、おおらかさ、気高さ、猜



疑心……といった人間性に触れることで、日本では気づいてもいなかった包容力を身につけているように見受けられた。

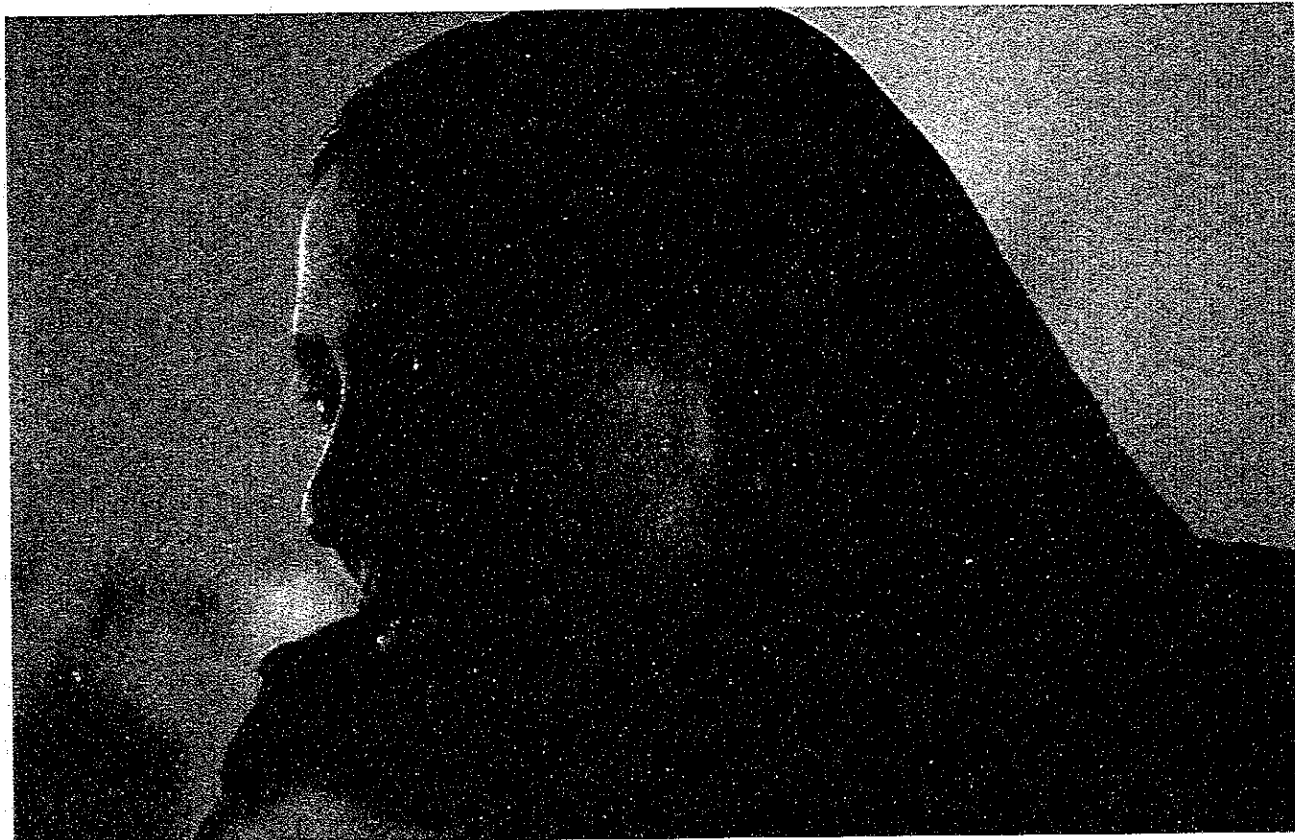
帰国が間近となった下村の口からは、会話のたびに「帰ったら結婚しなくっちゃ……」という独白ともボヤキともつかない言葉がもれた。ゆっくりと流れるベンガルの河の流れに身をまかせている間に、思わぬ時間が流れてしまっていたことにいま、ふっと気づいたというふうであった。



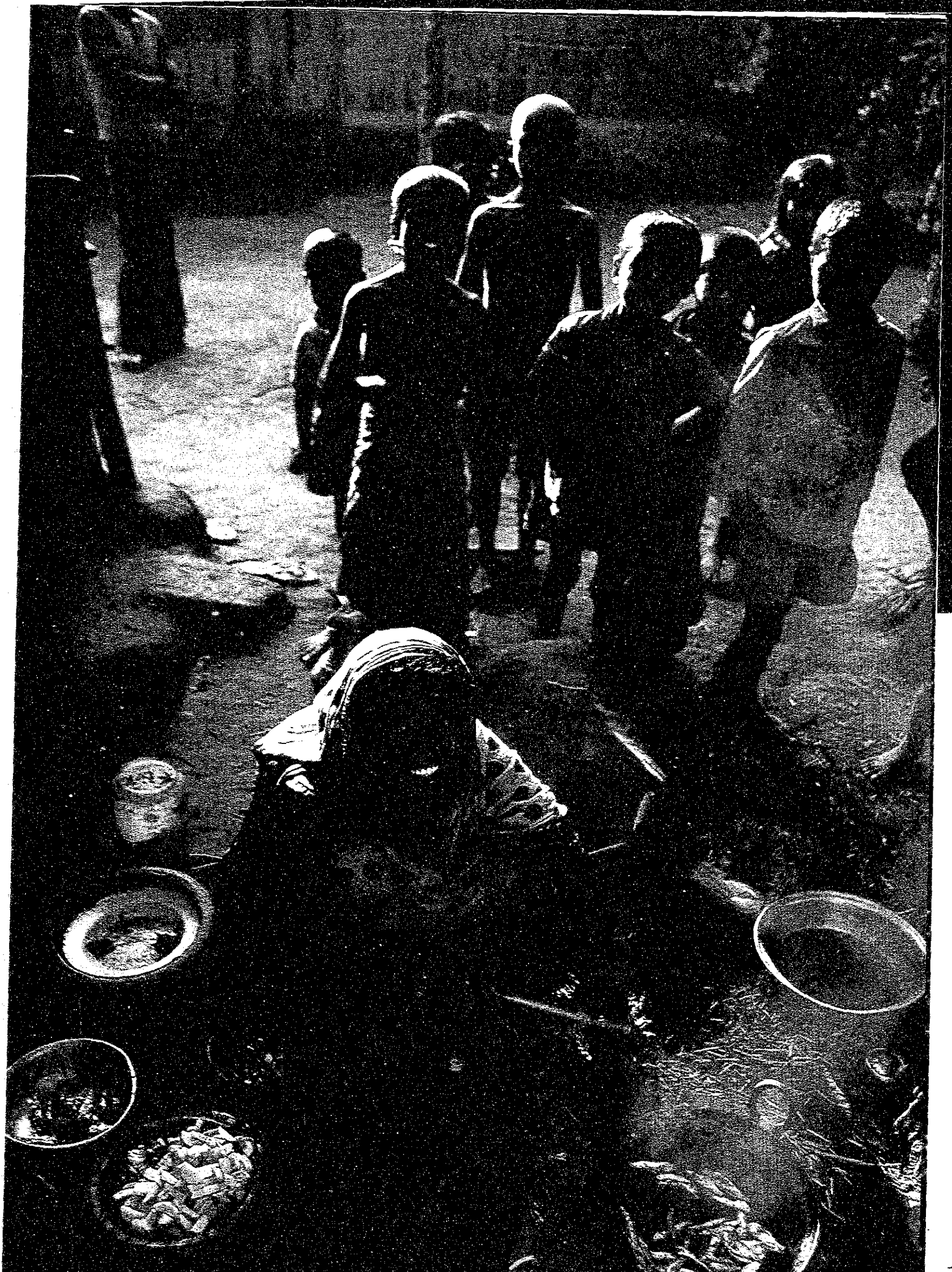
(上) 茶店に集まってきた男たちと測上隊員。
 隊員たちが市場を歩けば黒山の人だかりが周りを取り囲み、
 売り手が外国人と違ってぶっかけようなど
 しようものならたちまち当方の味方になって
 交渉してくれる。赴任当時オフィスには、
 外国人を見ようとするヤジ馬が
 連日詰めかけるといった具合で、
 この国の人々の好奇心の旺盛さは
 尋常ではないという。
 また食事に招かれることなども多い。
 ベンガル人たちにはひとりであることを
 極端にいやがる傾向があり、
 ぼっとかれることに耐えられない。
 日本の都会で育った隊員たちは、
 人間関係の濃密さに慣れるのに時間を要した



(左) 高気市場で買いものをする2人の隊員。野菜類は豊富であり、膨大な人口を養っている狭い国土の生産性は極めて高い。(中) 諫宇教室で各人にノートを渡す測上隊員。(右) 手芸の指導をする下村隊員。出来上がった商品はみやげ物屋で販売している。現金収入に結びつくことで婦人たちは熱心に仕事をする。



(上)バングラデシュはイスラム圏のため
女性は閉鎖的といわれているが、
このような写真が撮れることから見て、
イスラム圏のなかでは極めて
開放的な国民性であるように思える。女性たちは美人が多い。
男たちはだらしないのが多いが
女性は概してたくましく、生活力旺盛である。
(右)夕食の仕度をする主婦。
食事はカレー味のものがほとんどだ。
ベンガル人たちは
夕食よりも昼食時に多く食べる





[大地への祈り]

礼拝する老人。バングラデシュは石のない国である。

一部の地域を除いて。

国土はすべて沖積土で出来上がっている。

ガンジス、ブラマプトラ、ティスタという3つの河が

ヒマラヤを削り取り、運んで堆積させて

つくりあげた肥沃な国土である。

石のない、裸足に優しい大地である。

老人はこの豊かな大地に何を祈るのであろうか。

われわれもまた、大切な人と地球の明日のために

祈らずにいられない

